

学校参加の 質を問い直す

外部評価を軸として政策的に推進されている「開かれた学校づくり」と、三者協議会のような、地域住民・父母・生徒が学校運営に参加する教育実践としての「開かれた学校づくり」は区別されなければならないだろう。両者の理念のちがいは何か、どんな点で対立があるのだろうか。

政策サイドは、学校支援地域本部事業や学校評価などを掲げながら、親・地域の「学校参加」や「開かれた学校づくり」を唱えている。学校現場にはそれがもつ消費者主義的性格、校長応援団となり教職員管理の道具とされること、教師の教育の自由の制約などへの警戒、さらには組織づくりや合意づくりに対する疲れも見られる。「モンスターパーアレント」への警戒心も学校現場の反応を過敏にしている。

その一方で、こうしたトップダウンの学校参加ではなく、現場の必要と合意にもとづいて、立ち上げ実践してきた学校参加は、民主的な学校づくりや子どもたちの発達・成長を豊かに展開してきている。

本特集は、「子ども・父母・住民参加の学校づくりとは何なのか」について、校長・教師・生徒・父母によるとりくみの報告と当事者による参加を通じた育ちについての振り返りの報告、そして開かれた学校づくりに深く携わってきた研究者の分析から探っている。

なぜ、教師は、子ども・父母・住民に学校を開かなければならないと考えたのか。子どもや親たちは、学校参加をどのように受けとめたのか。その体験談と分析から学校づくりの本質を解きたいと思う。